

淡江社だより

第7号

平成26年6月発行



伝統の継承と発展を

塚本 尋

『淡江社だより』第七号が刊行の運びとなりました。前号（平成二十二年）からの四年の間に淡江社には大きな変化がありました。

まず、本部事務局の移転です。五十年来の書法研究所の拠点であった新宿区中落合から、現理事長宅の目黒区上目黒に移転しました。

そして、淡江社教室の多元的展開です。本部教室のほか、受号して資格をもつ会員によって各地にこれまでも教室が展開されていきました。これらの教室を、淡江社教室としてより実体にあわせた形でお披露目いたします。

教室所在地は次のとおりです。

新宿区中落合／世田谷区松原／
渋谷区道玄坂／練馬区豊玉北／
八王子市七国／山梨県南アルプス市／
千葉県一宮町／

さらに、恵泉女学園中学校や杏林大学八王子キャンパスでの書道部の指導で、若い方々と学びの喜びを分かちあっています。

長年来、長江先生門下で研鑽を積まれた先生方は、長江先生没後も一貫してその書の継承と発展に努めてこられました。

平成六年、山梨県立美術館での乾長江書作展を成功裏に開催したその年の七月に長江先生は永眠されました。門下の方々の結束は固く、翌年の平成七年には十七名による有志展が開催されました。爾後、二十年間に、上記各教室などにおいて地道な稽古の場が守られ、社中翰墨展を八回（平成七年、九年、十一年、十三年、十五年、十九年、二十一年、二十四年）、有志翰墨展を六回（平成七年、八年、十年、十二年、十四

年、十六年）、生誕百年記念としての「乾長江遺墨展」（平成十八年）、と、ほぼ毎年のように成果発表を続けてまいりました。そしてこの度、第二十八回淡江社翰墨展を開催するにいたりました。

私は乾長江の長女として、淡江社の息吹を呼吸して育って参りました。

仕事として国際会議の通訳現場や大学教育や通訳翻訳訓練などの場に身をおき、また昨今のデジタル文化やマルチメディアの氾濫する中で、筆を持つ静謐なひとときには時空を越えた深い文化的な豊かさを感じます。

まだまだ未熟者ではありますが、書の奥深さに深く惹かれます。諸先達に学びながら伝統の継承と発展のために精進してまいりたいと存じます。



父・長江と尋
昭和60年 展覧会々場にて

教室紹介

新宿落合教室

寺内 芳泉

新宿落合教室は佐伯祐三アトリエ記念館、通称、佐伯公園に隣接しています。

広い庭には、いろいろな花木、草花が咲きほこり、季節を感じながら書道の稽古をしています。



緑豊かな落合教室の庭

書道が好きに成る様、基本から一人一人手を執って、丁寧に淡江社の筆法を守って指導しています。

季節感と書道を、御一緒に楽しみませんか？

杏林大学書道部でも、教職員と学生が淡江社の書法を学んで居ます。

世田谷教室

本 松園



古帖を学ぶ

人に教えることは自分の勉強だから、と長江先生のお勧めもあり、自宅で指導する様になって、あっと云う間に三十数年になって了いました。その当時から続けている人もあり、古帖等を一緒に勉強したりして居りますが、書法を正しく学び筆を正しく

自由に使うことが出来る様になったら後は、自分の思うまゝに……と思つてやっております。

渋谷教室

二見 采談
渡辺 蕙芝

渋谷教室から生徒さんの声をご紹介します。

- お稽古を始めてまだ五回、ひたすら基本筆法の初歩に取り組んでいます、無心に一画に集中するのが楽しいです。
- 同じ筆なのに先生の筆先は錐の様に纏まり私では広がったまゝ。練習あるのみ？
- 生徒と対面し、先生が一人ひとり直にその手を取って教えて下さる教授法、なんて贅沢でしょう。
- お稽古中『あら、わたし、こんなに力んで生きているのだわ』と気づき、我ながら可笑しいです。
- 単に上手い下手でなく、字にその人の人柄、生き様、性格、個性が現れることに今更ながら気がきました。
- わたしがわたしの字を表すことができるようになるにはどれくらいのお稽古が必要

要でしょう。学ぶことが大好きなので一生かかってもいいかも。

○五十の手習いから卒寿の今日まで淡江社の教室に通わせて頂き幸せです。日常の雑事を離れ、墨の香り漂う静かなお稽古場で、長江先生の心を継がれた先生と向きあって筆法を学び、古典の心を探ることの大切さを教えて頂いております。まじめなお稽古後の若い方々とのお交り（ティータイム）も楽しいことです。



渋谷教室

練馬教室

三宅白玲

淡江社に入門して早くも四十年の歳月が流れました。故乾長江先生のご考案なされた書法のカリキュラムは実にすばらしく、他に例を見ないものだと思います。微力ながら後進のお役に立ちたいと、マンツーマンで、二十数年前より自宅に稽古場を開いております。

墨の匂いを嗅ぎ、筆と仲良しになることはとても楽しいことです。自己表現の世界ですが、書を通じてバランス感覚を身につけ、己の生き様に至ると考えています。練馬駅のすぐ近くですので、興味のある方はお訪ね下さい。



八王子教室

寺内芳泉

自宅八王子七国で教室を開いております。最寄り駅は横浜線「八王子みなみ野」です。小学生中学年から大人まで年令は幅広く、三十数年の間に多くの方々との出会いがありました。皆、のんびりと練習をして帰られます。



山梨教室

金丸紅花

三十数年前、友人の求めに応じ教室を開くことにしました。たみ奥さまから「月謝を払ってでも教えよと、長江から言われる前にお始めなさい」と、背中をおしていただきました。学び仲間の皆さんが、墨の香りに心とき放たれる幸せを語られる時、また筆法を学べば、無理せず筆を扱えるおどろきを語られる時、私も初心にもどります。



足の悪い方の為の椅子席もあります



山梨教室のお座敷

千葉県一宮町にて一年半前から、お教室を開きました。生徒は小学一年から四年の六名、淡江社の基本筆法に沿って週に一回一課題のペースで練習をしています。私は書道と共に子供たちに準備、挨拶、おけいこ、後片づけ、挨拶という、おけいこの作法を教えたいと考えています。「始めます↓よろしくおねがいします」「終わります↓ありがとうございます」等です。おけいこでは、子供ならではの素直な筆の運びと体の芯を使った自然な手の動きに驚かされます。書道が大好きという子供たち、最後におやつをいただいで楽しい時を過ごし

千葉教室

杉山 瑤華

経済優先の現代にあっても、欲にまみれない精神の尊厳と人間の品格を保って生きうることを、長江先生は身をもってきびしく示されました。弟子に惜しみなく傾けられた愛情に今なお包まれながら、「書は芸術にあらず、日々の行である」との教えに、遠い目標をおいて、歩みをつづけてまいります。



ひとり ひとり 手をもって

ます。将来、子供たちと作品展ができたらずと夢は広がります。



私の眼に觸れた

「書」の或る世界

乾 節子

私が初めて展覧会の書に接したのははまだ幼児の頃、上野竹の台の、美術協会での、選書奨励会展であった。母が、全紙に大筆を以って揮毫した「神清」の二字を出品している。

確か、その際、同じく出品された父の門下の、波多野承五郎氏の作品が、当時の宮内省にお買いあげになったことを記憶している。

母は家事のあいまに襷と前掛をはずしては、座敷の毛氈の前に坐し、「神清」の大字を全紙に、大筆で稽古していた。しかし、私は出品制作ということは毛頭考えても居ず、会場へ伴われて初めて母の作品を見、幼な心に感動はしたが、私の頭には誰でもするあたりまえのことのような、そんなおもいがしていた。

事実、その頃は、知識的な家庭は当然、八百屋も魚屋も大工、植木屋もというよう

に、各商家の人々も職人たちも同様、都会はもとより鄙ひなでも、農家耕人に至るまで、凡てが硯ひなをもち、矢立ひなをもち、墨壺ひなをもち、筆を用いて、大小自在に書きこなす、毛筆は人々の生活の中にあつたのである。看板屋、提灯屋などは、その店の前で佇んでは飽かず眺めていられる情景が各所にあつた。明治、大正期はそうした風であったのだ。

従つて、母がその父から、生き形見として與えられて大切にしていた、梁川星巖眞筆の小品、しかも無落款のそれを度々見せてくれたが、年少だった私にでさえも、星巖のその流麗な書風が眼底に、明瞭に深く印象せられていたものと見え、後年、旧知を訪ねての旅の時、佐賀の、或る、これは旧いお宅の、袋戸棚の下方の壁にかかつていた小品の軸を、ひと目で、「これ、星巖でございますね」と胸おどらせてそういう私の言辞をうけて、その家のご主人は目を輝かせ、「やっぱり、そうですね、よく、ひとが見ては、無落款だが若しかすると、これは星巖らしいと、それは目の利く人が、そういわれるので楽しみにしてはいたが、やはり、そうですね」と、本當にうれしそうにほほえまれた一事がある。但し当の私



西方尼寺 利休の井戸にて
昭和46年3月 乾 節子

は、星巖の草書だけしか不分明なのである。当時は、たとえ、鉛筆が作られようと、万年筆が輸入されようと、人各々が、毛筆というものについては現今とは、まるで異なる風や、体たをもっていた。

だが、特に、書や畫を業とする人々は、自らなる己を己として生かす、何ものかを育成してゆく、一歩前進のすがたといおうか、人々からその芸術性をそこはかとなく認められるといおうか、或る尊敬に似た感情さえ持たれたにもかかわらず、所謂、書家（畫家も同様であった）とよばれる人々の生活は、なかなか貧しくきびしいのが

常であった。

だが、尤も、今日でいう、パトロンの人をもつていた作家は別である。私の印象に強く残っている、端正な楷書を書かれた、月出東山という方などは、その家族の方達のお上の、今、何うしておられることかと、私は折にふれてはお思いやりするのである。

高い芸術性をもつべき書が、近頃、年を重ねる毎に、だんだん低くなりはじめているのを感じるのは、この私ばかりであろうか。所謂、書家と称する人々が、己の作品に、似非氣韻を自負しはじめてきた故と私は思う。

だんだんに、高慢な性格が度を増した人達、或は、自己追究のいいかげんな人達の



初代 乾 玉江 (淡江夫人)

間に誤解された六朝風から、卒意の名のもとにつくられた無態な宋風、明清調、又、新風のつもりか、前衛という、当時、流行の、文学から移行して来て、いとも奇怪な「墨の芸術？」とか、「黒の美」とか、筆の本質の理解の無い為に、使いこなせぬ筆を、あたから、被^{こう}つてしまった「書家」の名の故か、書の展覧会といえは、不可解なものだという印象を世人に、與えてしまった人々を、私は救いたいものと思う。

彼の大正十年、日本書道会が、平和記念博覧会の際、芸術として扱われることに、いわれのない、不本意の意志表明をして、書道界を混乱せしめたので、元来は、こうした問題にかかわることを好まぬ父ではあったが、当事者の宇佐美東京府知事の要請により、「平和記念博」という名の故に、その門下を率いて、田口米舂、佐藤梅園とともに帝国書道会を結成し、日本書道会の、所謂、反対側の人々、稲垣、大田、杉溪の面々、専門家としての、近藤雪竹、丹羽海鶴、比田井天来、柳田泰麓、岡山高蔭等を説き伏せた、豊道春海の努力と相俟って、斯会の混乱をまとめ、会長に後藤新平を推した。

後藤新平は、父淡江が領台当時、要務を帯びて勤務中、民政長官として活躍、其當時から親交があったのである。

父を識る後藤新平は、悦んで應じられ、平和博終了まで、その責務を担い、博覧会終了とともに、帝国書道会は解散した。

門下の、関直彦らその他の人々は、折角の結集を、又と得がたく思われてか、中味は少々変わっても、この雰囲気を続けたいという切なる要望が起って、いわば、全国の、諸書道会の、曾^まつてない、大同團結に、ここへ田中舎身らも加わって、日本書道作振会が誕生した。

しかし、一方、民間に浸透していた筈の書は、所謂似非芸術化の波となつて、却って、民衆から遊離していった。

「前衛」という呼称が、本来の前衛とは、はぐれたような印象を与える始末となつたのである。はやっているように見えて、実はすたりもの、いわば、斜陽的な感をさえ与えている現状である。

「書」は、ひと、個々のもので、決して、特別視はゆるされず、精進怠りなければ、それは勿論傑出する。「能書家」といわれることも可能だが、書家と呼称しながら、

実は、能書とは何としてもいえぬ人々がいかに多い現実であることか。

深い心と技とが相伴って、はじめて、それは云えることではないだろうか。

戊辰書道会展とか、泰東書道院展などが催された頃、当時の書道展は、会場の順路の中段に、各書家先生方の、席書の設備がされていて、その日の揮毫の方によると、身動きならぬまでに、ステージを囲む人垣が出来た。同時に、抜目なく、筆屋も、紙墨を商う者も出張店をもった。

それは所謂、名の聞えている方の時だった。伴っていつてくれた母は、知見の故もあるのです、ずっと後方に居た。年少で、しかも興味津々の私は、青竹の太い手摺に添って佇ち、その方の毅然たる揮毫の情景を想い描きつつ、じっと目を凝らした。さて、処が、使いなされたらしい大硯に

は、宿墨のかたいかたまりの真中に、墨汁がたたえられていて、和服その方は、右袖を襷でしぼり、手にされた大筆は墨のかたまりのようだったが、左手に煙草を挟みながら、前歯で、グググッと噛みしだいてから、墨汁に浸し、そうして、泡だっているその筆毛で半截に、ぎざぎざと、それは、筆毛の弾性も全く無頓着に、それは、無視そのものの蕃勇とでもいおうか、横なぐりに、体など全くなさないままに、大汗でものされると、そのまま、いともこともなげに、落款までされてしまった。私は、暫し、全く、啞然とした。

あれであの方は、風韻とか、気韻とかを云々されるのだろうか。心技とは、夢々、決していえないものだと考えながら、とにかく、あれこそ、一種の、字描き職人ともいえないと、私は結論した。



乾 淡江

「書」を書くことは

「日日の己の姿を己の字に見る行」である。

淡江

日展にしても、毎日書道展にしても、迫真的な、心揺ぐような、その作品の前を立ち去りたいような作品に、接し得る機会が少ないのはどういふわけか。

発表されている、書の大きな展覧に関するかぎり、私は、いつも、人間性の、低俗に墮してゆくのを、しみじみと、寂しく思うのである。

(註) この原稿は、昭和五十三年七月三日の消印で、当時京都等泉寺におられた節子先生から、長江先生宛に送られたものです。

第四号の記事を援用し、関連の写真を付して再掲載致しました。

会員 小川光晴氏

舞台で筆を…

歌舞伎俳優で淡江社会員の中村時蔵（小川光晴）氏が、昨年七月、国立大劇場にて「芦屋道満大内鑑」の葛の葉を初役で演じられました。

陰陽師安倍晴明の出生の秘話で、安倍保名に救われた白狐が、保名の恋人葛の葉姫に化けて夫婦となり、子をもうけます（のちの晴明）。しかし、そこへ本物の葛の葉姫と両親が現れ、悲しい親子の別れとなってしまうという筋書です。

我が子を抱いたまま左手や口を使い、下から上へ、あるいは左右逆に、別れの歌を障子に書く「曲書き」が見どころのひとつです。「書道の先生に付いて稽古した。坂田藤十郎さんには筆をくわえやすくするな」と一から教えていただいた。と、役作りのご苦労を語っておられます。その書道の先生が淡江社の本松園先生だったのです。舞台写真の字を拝見すると、まさに淡江社の書風そのもの。曲書きとは思えない端正で

格調高い筆跡に、思わず目を見張ってしまいます。

朝日新聞の劇評欄には「本物の葛の葉姫の間も、当代有数の赤姫の柄で優美そのもの。障子に残す和歌の曲書きが、近年の葛の葉の内では鮮やかで、平生の用意のほどがしのばれる。」（児玉竜一・歌舞伎研究）との好評がありました。

人間と狐の二役を演じわける難しさに加え、舞台の上での揮毫、それも曲書きを見せなくてはならないとは、歌舞伎はまことに奥の深い総合芸術であります。演者の日々のご精進に感じ入りました。益々のご活躍を期待いたします。（H・M記）

恋しくは（下から上へ書いています）

尋ねきてみよ 和泉なる

信田の森の

（左手書きの裏文字）

うらみ葛の葉

（筆を口にくわえて書いています）



「芦屋道満大内鑑」葛の葉
平成二十五年七月三日～二十四日

国立大劇場
撮影・小川知子

三越呉服店のこと

松原 白葉

昭和四十六年四月発行の、乾節子詩文集『いくその春秋』は、オフホワイトの簡素な表紙が如何にも節子先生らしいご本です。

表紙をひらくと、まず詩が十一篇、短歌が百五十三首、それから随想が二十一篇収められております。その中に「三越呉服店のこと」という一文があるのです。節子先生と三越に一体どのような関りがあったのか、大いに興味を覚えました。

実は、亡くなりました主人が長く三越に勤めておりましたので、私にとって三越の二文字には特別の思いがあるのです。主人はいわゆる会社人間でしたし、愛社精神などという言葉も通用した世代でしたので、妻の私も三越の一員のような気持ちで過して居りました。十時の開店の時に流れる「お江戸日本橋」を耳にすると、自然と涙がこぼれます。そもそも三越がなければ、主人と出合うこともなかったのですから。

節子先生がお小さかった頃の三越は、三越呉服店と称し、店は全部、畳敷き。札を

貫つて下駄を預けるか、靴の人は茶褐色のカバーを掛けてもらつて上つた時代です。当時の番頭さんの仕事ぶりや、躰のよさで評判だった女子店員の様子等が鋭い観察眼で活写されていて、三越にとつて歴史的資料となるのではないかと思える一文です。その中でも、私が一番注目したのは、終りの数行です。以下その部分を引用いたします。

大地震で焼けた、三越呉服店という、五字の看板は、少し隸書の味の加わつた楷書で、父淡江が書きました。百貨店になつてからの三越の二字は、滑川澹如という人が書かれました。時々、日本橋の三越へゆくと、あの獅子の前で私はしみじみとなつかしい思いになるのですが、——略——

三越呉服店の看板を乾淡江先生がお書きになつたとは、この一文を読まねば知り得ないことで、本当に驚きました。

主人が在職中の二〇〇四年に、株式会社三越呉服店となつてから百年の節目があり、四百ページにも及ぶ記録本が編纂されました。早速にその本を奥から引っぱり出して、淡江先生のお筆による看板の写真を探してみました。古い写真やポスターに三越呉服

店の筆文字はいろいろ残されているものの、それらしき看板を特定できませんでした。

そこで、三越に資料室のような部署があると聞いたことがありますの思い出し、本店へ電話をかけてみました。男性の担当者が親切に応対を下さいましたが、看板のことはご存じありませんでした。その方のご説明によると、大正十二年の大震災による火災で、当時の物は全て灰燼に帰し、資料も記録も何ひとつ残っていないのだそうです。日本橋より魚河岸、三越のあたりは海風を受けて火のまわりが速く、被害は甚大だつたとのことでした。

淡江先生のお書きになつた三越呉服店の文字、是非拝見したかったのに、残念ではありません。どこかに、何方か、その写真をお持ちの方はいらっしゃらないものでしょうか。



大正12年9月
大震災直後の
三越呉服店正面

ナンノウ庵のこと

大岡 瑛川

残された宿題

「淡江社だより」第一号に「書との出会」と題する文章を書きましたが、その第一歩は小学校に入る前の年の四月「ナンノウ庵」と云う私塾で 国語・算術と同時に習字の学習と云う形で スタートしたことを申し上げました。「ナンノウ庵」とはどんな字を書くのか判らなかつたのが 宿題のように気にかかっていましたが、最近判明したので ご報告する次第です。



滄桑の変

あれ以後に何度か浜松に行った折 駅前
の旧東海道に沿った板屋町辺りを尋ね歩いて見たのですが、浜松市の特に駅に近い地区の再開発は徹底的で「滄桑の変」も斯くやとばかり、塾のあった寺そのものが移転して跡形も無く 全く手掛かりが掴めませんでした。

(註) 滄桑の変 「滄海桑田の略」桑田変じて滄海となるような大変化。世の変遷の甚だしいことをいう。(広辞苑)

資料の入手

弟の息子が浜松市役所に勤めていて、私の歎きを聞き、早速調べて資料を送って呉れたので一挙に解明した事実を 次に記します。

塾のあった寺は、浜松市の古刹天林寺の子院として 天正十四年(一五八六)林泉寺が開創されたのを始めとする。それから百年ぐらい経ってから南能庵と号していたが、明治十三年九月には大聖寺と改められた。曹洞宗の寺で 清水次郎長の子分で有

名な小政(山本政五郎)の墓もあった。

南能庵

主役の南能庵を開いたのは 永田ふくと云う旧幕臣の娘で 文久二年(一八六二)生まれ、生後間もなく幕府は瓦解し、多くの幕臣は徳川慶喜に従って駿河の地に移り 牧ノ原や三方ヶ原に開墾の鋤をふるったが 様に生活は苦しかったであろう。彼女の父も駿河を経て明治十五年、ふくが十五歳のとき浜松に移住してきたが、すぐに彼女は元城小学校の教師に就職した。その後結婚し、一子をもうけたが、若くして夫を失い、二十六歳の時大聖寺の中に私塾を開設して南能庵と称した。当時既に寺号は大聖寺に改まっていたが、永く地元で親しまれていた南能庵の名を私塾につけたものと思はれる。この私塾は昭和の初期まで三十余年続いたもので この塾に学んだ人の数も多く 今も健在な人達は多いと思はれる。

南能庵の教育は読み、書き、ソロバンであったとあるが、私はソロバンはやった記憶はない。とくに書くことには力を入れたそうである。彼女は「実」を身につけさせることを主眼とした教育方針をとり、指導

はきびしかったという。ふくが他界したのは太平洋戦争中の昭和十九年で享年八十二歳であった。その後本堂も塾の建物も昭和二十年六月十八日の米軍機による空襲で焼失し、戦後いち早く復旧したもの、私が尋ねた頃は再開発で移転し、跡形もなく、こゝに南能庵があったことを知る人も少なくなつたというわけである。

思い出

或る日 昼食に家へ帰った男の子が、サツマイモを喰べながら塾に戻り、イモのシッポをふざけて教室内の誰かに投げつけたものだ。いたずら盛りの子供達のこと、拾っては投げ返し、ワイワイやっていると、奥から現れた先生がグツと睨んで「何ですか騒々しい!!」と重々しい声でたしなめて、張本人の子供は、火のついた線香と水の入った湯呑を両手に持って暫く教室の隅に立たされる羽目になった。この時の先生の言葉と態度は、今も私の耳目にハッキリ残っており、先生が武家育ちであつたと知って成程と納得が出来たものである。

接点

私は小学六年生の正月に東京に来て、成人の後大岡家（父の妹の嫁ぎ先）の養子となつたのだが、この大岡家も御家人（下級武士）の一人で明治初めには、静岡・浜松に在勤したこともあるそうだから、数代前の御先祖は御同輩だったかも知れず、世の中はいろいろな繋がりがあるものだと感ずると共に、先生の晩年にもう一度お会いできたら良かったのにと、これは現在の感慨である。

以上



入門ご案内

ベテランの講師が基礎から個人指導をしております。お問い合わせは左記へ郵便またはメールでお願い致します。

淡江社

東京都目黒区上目黒一―十七―五

塚本方

URL <http://www.tankousha.jp/>

E-mail info@tankousha.jp

訃報

乾 たみ 平成二十四年 二月
白須賀春菜 平成二十五年 四月
糸柳静汀 平成二十五年十二月
荒木幽光 平成二十六年 三月
神田藤花 平成二十六年 五月
淡江社にとり、掛け替えない大切な方々のお別れが続きました。長年にわたるご尽力とご功績に感謝申し上げます、謹んで哀悼の意を表します。

編集後記

淡江社本部事務局の移転にともない、稽古場が各地に増えました。今号では各教室をご案内させていただきました。

また、平成二十二年に百五才の天寿を全うされた乾節子先生の遺稿を紹介させていただきますました。淡江先生の時代の書を取りまく世間の様子や、淡江社が求め続けてきた、あるべき書の姿が伝わってくるテンポのよい文章です。昨今の風潮にも通じる問題であり、自戒としたいところです。

「ナンノウ庵のこと」では、九十才を越え、大岡瑛川翁のペンが益々味わいを深めております。幼い日に巡り合った師の影響がこれ程までに永く人の心に残るものなのだということを知りました。

この度、貴重な資料とお写真を快くご提供下さいました中村時蔵・小川晃枝ご夫妻に、心より御礼申し上げます。(H・M記)

第二十八回 淡江社翰墨展

会期 平成二十六年六月六日(金)

〃 十一日(水)

会場 有楽町朝日ギャラリー



発行 淡江社

東京都目黒区上目黒一―十七―五 塚本方

電話 〇三―三七―一三一四一八〇

編集委員 大川瑛川・本 松園

塚本 尋・松原白葉

題字 武藤素英